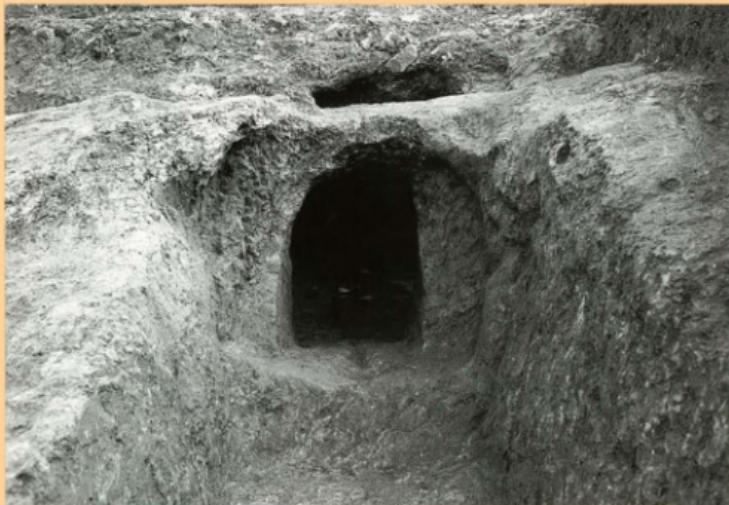


亀田横穴群



1993年3月

島根町教育委員会

序

本町では、古墳時代の横穴群が町内の大芦・野波の2地域に各々一箇所ずつ存在することが古くから知られています。中でも野波の亀田横穴群は明治42年に発見され、出土遺物が今も東京国立博物館に所蔵されており、島根県でも名の知れた横穴群です。

ところが、平成3年度から開始された県道多古鼻線改良工事区域と本横穴群の一部が重なることがわかり、該当部分を発掘調査することになりました。道路拡幅部分に沿った範囲でしたが、平成3年10月半ばから、約1か月半かけて実施いたしました。

その結果、予想通りの資料が得られ、本横穴群が少なくとも島根半島では第一級の横穴群であることが判明しました。この場所は、交通事故多発地帯でもあり、あくまでも住民の生命の安全と交通の安全を第一とする立場から、やむなく横穴1穴の前庭部を記録保存に留めることになりましたが、ここに調査の成果を公表し、今後における本町さらには、島根半島全域の古代史解明および文化財の保護と活用に資することを期したいものと考えます。

終わりに、本調査に対し格別のご援助とご協力をいただいた島根県教育委員会文化課、島根県松江土木建築事務所、直接調査を担当していただいた宍道正年氏、その他関係各位に対し深甚な謝意を表する次第でございます。

平成5年3月

島根町教育委員会

教育長 金 村 庄 吉

例　　言

1. 本書は、島根町野波、一般県道多古鼻線道路改良工事に伴い、島根町教育委員会が島根県松江土木建築事務所から委託を受けて実施した亀田横穴群発掘調査の報告書です。
2. 調査の組織は次のとおりです。

調査主体	島根町教育委員会		
調査指導	島根県文化財保護審議会会長	山本	清
	島根県教育委員会文化課主事	丹羽野	裕
調査担当	浜田市立美川小学校教頭	宍道	正年
	(平成3年度は松江教育事務所派遣社会教育主事)		
事務局	島根町教育委員会 教育長	金村	庄吉
	(平成4年10月以前は伊達 章)		
	教育次長	余村	滋
	教育次長補佐	湯原	章

3. 発掘調査に際して(余村組、中村留五郎、稲田由雄、中村ヨシエ、川岡喜美枝、川岡コマ、青木小波、稲田和子、川岡清治、湯原伴一の各氏から多人の援助を得ました。記して謝意を表します。
4. 遺物の整理・実測・写真撮影には宍道があたり、特に土器の実測については島根大学学生の野田直子氏の協力を得ました。
5. 図面の作成は奥村美佐子氏の協力を得ました。
6. 本書の執筆は宍道があたり、編集は宍道が湯原と協議して行いました。
なお第1章の「はじめに」は、松江土木建築事務所からのご寄稿です。
7. 表紙の題字は島根町教育委員会教育長金村庄吉によります。

目 次

Iはじめ	1
II 遺跡のあらまし	6
調査に至る経緯、遺跡の位置、鳥根町内の主な遺跡	
III 横穴とは～意味とその時期	10
横穴とは、横穴の時期、調査区域内の地形測量図	
調査区域内のトレンチと北第Ⅰ支群第1号穴の配置図	
IV 調査のあらまし	14
調査の方法、亀田横穴群北第Ⅰ支群第1号穴	
V 今までに知られている横穴のあらまし	30
はじめに	
1. 北第Ⅰ支群	
2. 北第Ⅱ支群	
3. 北第Ⅲ支群	
4. 南支群	
VI まとめ	35
亀田横穴群一覧、まとめ	

かめだよこあなぐんはくつちょうさほうこくしょ 亀田横穴群発掘調査報告書

I.はじめに

下の写真をごらん下さい。島根町の野波地区にある県道多古鼻線の道路改良工事の様子です。この道路はほとんど未改良のため、道路の幅が狭く、その上曲線部（カーブ）も多く、交通事故がたびたび発生しています。非常に危険な状況です。



県道多古鼻線の道路改良工事

そこで、通行する自動車、自転車そして歩行者の安全を図るため、平成3年度から工事が始まりました。参考までに、この道路の現在の状況と改良工事の構造規格は次のとおりです。

1. 現況

起点 八束郡島根町多古鼻地内

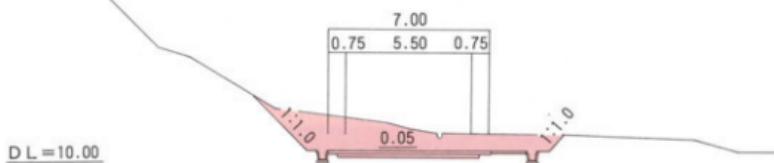
終点 小波地内

路線延長 L=2,140.0m

道路幅員 W=(全幅) 4.00m、(有効) 3.00m

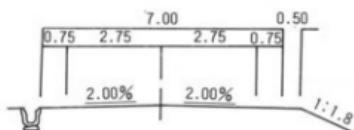
道路改良済み延長 L=323.0m (改良率15.1%)

亀田横穴群北第Ⅲ支群第1号穴付近標準横断面図



2. 道路改良構造規格

- ・道路規格 第3種、第4級
- ・設計速度 30km/hr
- ・幅員構成



設計基準

種別	基 準 値			使用値
曲線半径	最小	30	特例	m 34 m
曲線長		50m以上		79,939m
片勾配	最大	6.0%	最小	20% 6.0%~2.0%
緩和区間長		25m以上		26.471m
視距		30m以上		
縦断勾配	最急	8.0	特例	9.0 8.99%
縦断曲線長		25m以上		40
縦断曲線半径	凸型	250m以上		
	凹型	250m以上		610m
合成勾配	11.5%以下	特例	12.5%	10.8%

県道多古鼻線道路改良工事平面図

■ 調査対象区域
— 県道多古鼻線
(改良工事前の道路)

北第1支群第1号穴



工事の着手にあたって、現地調査したところ、小波地内の工事区域において、一部分
埋蔵文化財「亀田横穴群」と重なることがわかり、工事に先立つ調査を実施しました。

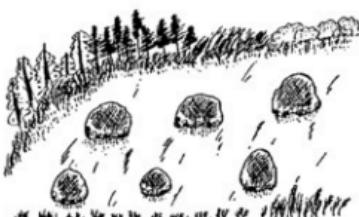
こうごくまめし

考古学豆知識 No.1 — 横穴は住居にあらず —

島根県内はとんどの市町村にこの横穴はある。山の斜面に対して水平方向に直接掘り、くぼめられた大きな穴である。穴の形は家形あるいはドーム形。床面の広さは二畳余り。中央部での高さは1.5~2メートル。あたかも独身者向きの住居の感じ。だから「横穴式住居」と呼び、その昔人間が住んでいたと考えるのも無理ない。だが、本

当は1400~1500年前のお墓なのである。

今でいう集団墓地に当たり、一ヶ所に數穴、数十穴も作った。そして穴の入り口に扉をすることによって何回も使用した。一穴から十数体分の人骨発見例もある。



じょうもん なら りゅくねんびょう
島根町の縄文時代～奈良時代までの略年表

年 代	時 代	人々の暮らしやできごと
	先土器時代	<ul style="list-style-type: none"> * 多古の七ツ穴遺跡という説もある。
今から約1万年前	縄文時代 (島根町内で縄文時代の遺跡は未発見)	<ul style="list-style-type: none"> * 土器を作り始める * 人々は狩りや漁で生活し、貝塚などを残した。
今から約2300年前		<ul style="list-style-type: none"> * 大陸から稻作りが伝わる
紀元1年	弥生時代 (島根町内で弥生時代の遺跡は未発見)	<ul style="list-style-type: none"> * 弥生土器が作られる * 鉄器や青銅器が使われ始める。 斐川町の荒神谷遺跡に358本の銅剣、銅矛、銅鏃が埋められる
100年		
200年		
300年		<ul style="list-style-type: none"> * 邪馬台国の大弥呼、魏(中国)に使いを遣る * 島根県内でも大型の古墳が盛んに造られ始める。
400年	古墳時代 (島根町内では今のところ5世紀の古墳から始まる)	<ul style="list-style-type: none"> * 人和王權を中心とする政治的なまとまりがつくられる * 出雲地方で須恵器の生産が始まる * 加賀の牛谷古墳と天神山古墳がつくられる * このころから横穴墓が多く造られ始める
500年		<p>538 仏教が伝わる</p>
600年		<p>593 輪徳太子、攝政になる</p>
700年	奈良時代 (加賀と大芦は島根郡加賀郷に野波は下駄駅に属す)	<p>* このころ大芦の宮尾横穴群や野波の龜田横穴群の横穴墓がつくられる</p> <p>645 人化の改新</p> <p>710 平城、京に都を移す</p> <p>733 出雲國風土記ができる</p>

Ⅱ. 遺跡のあらまし

調査に至る経緯

亀田横穴群は島根県八束郡島根町大字野波の小波地内にあります。島根半島でも有数の海水浴場「小波海水浴場」の東側丘陵斜面のすそに位置します。

古くからこの場所に横穴が存在していることが知られていました。明治42年（1909年）土砂採取中に1穴発見されたのが最初です。昭和62年『島根町誌』刊行の時点で合計11穴が確認されていました。島根県教育委員会の『遺跡台帳』にも記載されている周知の遺跡です。

平成3年9月24日、県道多古鼻線道路改良工事箇所内に、本横穴群が含まれることが確かめられ、松江土木建築事務所より島根町教育委員会へ事前の発掘調査を請がありました。今回の調査はこれを受け、平成3年10月18日から11月30日まで延べ32日間で実施したものです。



亀田横穴群の遠景（写真中央が北第Ⅲ支群）

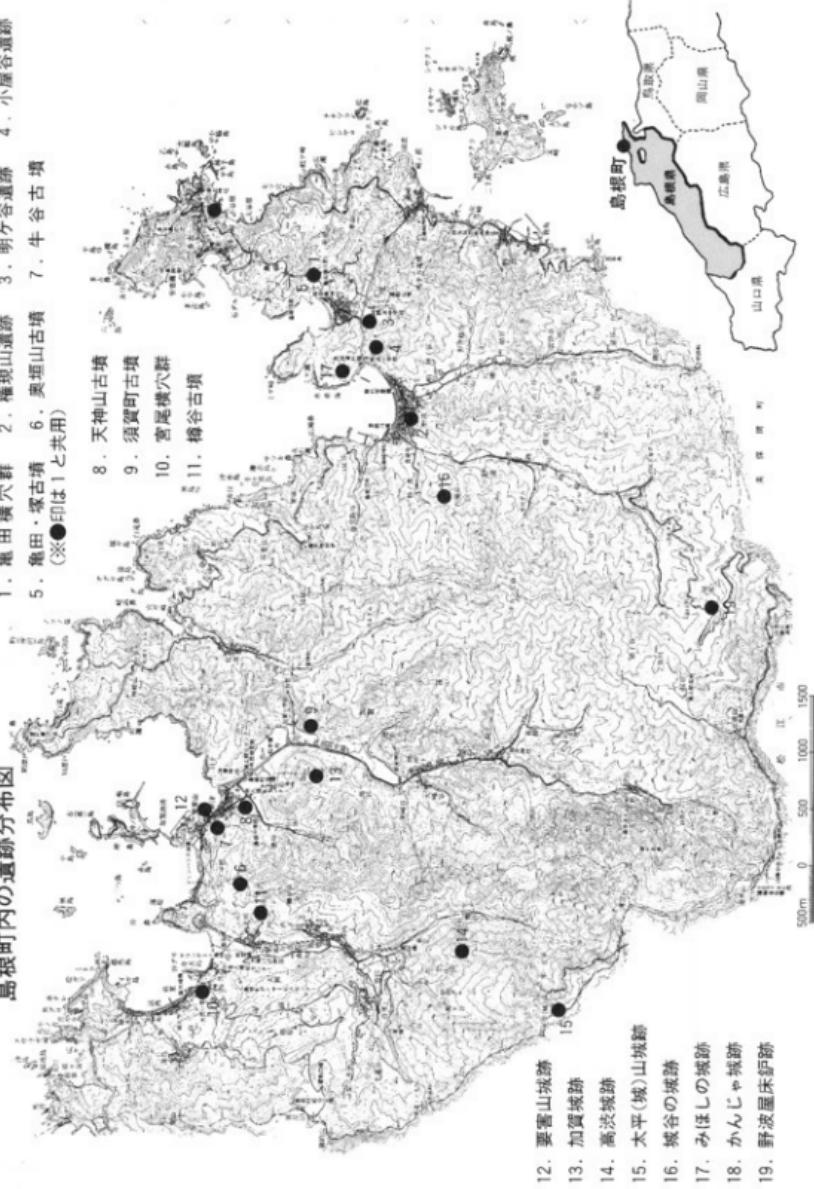
遺跡の位置

本横穴群の存在する島根町は、島根半島の北側、日本海に面した位置に当たります。島根半島の最北端、「多古鼻」のちょうど“つけ根”辺りの低丘陵西側斜面（標高

島根町内の遺跡分布図

1. 魚田横穴群 2. 権現山遺跡 3. 明ヶ谷遺跡 4. 小屋谷遺跡
 5. 魚田・塚古墳 6. 奥垣山古墳 7. 牛谷古墳
 (※●印は1・7共用)

（※印）は「」と表用



10~20m)に本横穴群が埋められています。(丘陵は約50m離れて南北2つの支脈に分かれ、各々に横穴群があります。以前から北側にあるものを龟田北横穴群、南側のを龟田南横穴群というように呼ばれてきましたが、今回は龟田横穴群として両方をまとめて扱います。)国指定天然記念物「多古の七ツ穴」からは南西へ直線距離にして約1kmの地点です。海岸に突き出る丘陵のすそに位置し、日本海を見晴らす一等地です。地籍の上では、八束郡島根町大字野波字平田63番地とその他数か所の番地にまたがるかなりの広さ(約50アール)の傾斜地をほぼ遺跡の範囲とします。なお、本横穴群の約500m南には島根町立野波中学校があります。

島根町内の主な遺跡

現在までに町内の周知の遺跡は19か所を数えます。野波、加賀、大芦3地区各々に分布しています。古墳が中心で、縄文・弥生時代の遺跡は未発見です。以下、主なものを簡単に紹介します。

野波地区には龟田横穴群のほかに、古墳時代の遺跡が4か所見つかっています。権現山遺跡(2)は直径10mくらいの墳丘のように加工されており、古墳の可能性があります。昭和39年、野波中学校の敷地造成工事によって発見された明ヶ谷遺跡(3)も古墳かもしれません。出土した須恵器という土器は、龟田横穴群と同じ頃の7世紀のタイプです。昭和47年、野波小学校のブルービル建設工事中に見つかった小屋谷遺跡(4)は、古墳時代7世紀ごろから、奈良・平安時代ごろの遺跡です。この遺跡でとくに注目されることは、製塩用の土器が出土したことです。龟田・塚古墳(5)は龟田横穴群のある丘陵のすそにあります。昭和18年の時点では、蓋のなくなった箱形石棺が畠の中に出ていたそうです。

加賀地区には4基の古墳があります。古墳時代後期の疑似石棺式石室を備えた奥垣山古墳(6)、古墳時代中期(5世紀)の長持形石棺あるいは舟形石棺の特徴をもれた2つの箱形の石棺を持つ牛谷古墳(7)、同じく中期型箱形石棺2つを持つ天神山古墳(8)、そして6世紀後半(N期)の蓋杯が出土した類似石棺式石室の須賀町古墳(9)です。

大芦地区には島根半島で第一級、県下でも指折りの最大クラスの横穴群、宍尾横穴群(10)(平成元年度と2年度の発掘調査で合計37穴の横穴を検出。6世紀の後半から7世紀の後半までの時期。)があります。箱形石棺を墳丘の中に納めた古墳時代後期(6~7世紀)の樽谷古墳(11)もよく知られています。

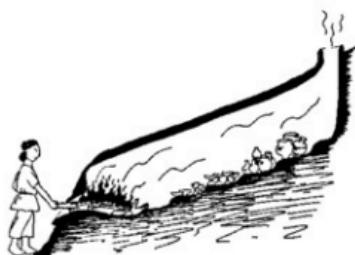
中世戦国時代の尼子氏と毛利氏攻防に關係した城跡は町内に6か所あります。加賀地区には要害山城跡(12)と加賀城跡(13)、大芦地区には高浜城跡(14)、大城(平)山

城跡(15)、そして野波地区には城谷の城跡(16)、みほしの城跡(17)、かんじや城跡(18)があります。

なお、野波地区には山陰海岸部で初めて発見された中世の「野だたら」遺構を持つ野波屋床跡(19)があります。標高約250mの丘陵中腹に位置し、急斜面を切り開いた約0.5haの扇形テラスに設けられています。

こうこがくまめちしき

考古学豆知識 N.2 —— 須恵器は硬い ——



ネル状の縫がポイントです。1100℃以上にも高温になるそうです。なお、粘土で形をつくる時には「ろくろ」を使っていました。

亀田横穴群からは須恵器という焼物が大量に出土しました。古代の代表的な土器です。今から約1500年くらい前、朝鮮半島から日本へ最新技術として伝わりました。それまでの素焼の容器にくらべ、はるかに硬くてこわれにくい。だからまたたく間に全国へひろまりました。

この絵のように「あな窯」というトン

よこあな いみ じき III. 横穴とは～意味とその時期～

横穴とは

「横穴」とは「横穴墓」あるいは「横穴古墳」とも言われるよう、大昔の墓です。形が家とよく似ているため「横穴式住居」というふうに誤解されるむきもありますが、決して「住居」ではなく「墓」です。今から約1400年位前（6世紀後半～7世紀末）、古墳時代とか大和時代あるいは飛鳥時代と日本史の中で呼ばれている時代につくられた墓です。要するに「古墳」の一種です。古墳には「まんじゅう形」の埴丘をもつものばかりでなく、横穴のように、山の斜面に直接遺体を納める部屋を掘り込むものもあるのです。

横穴はふつう当時のムラの中で、中流ないしそれ以上の有力者層の「家族墓」（主人とその家族用の墓）と考えられています。（現在とちがってそのころは階級社会ですから、横穴がつくれない人々もいました。）横穴の入口の扉をはずしさえすれば何度も遺体の安置ができます。だいたい平均3回位使っているそうです。現に今回調査した亀田横穴群北第Ⅲ支群第1号穴も少くとも2回以上使っていることが明らかになりました。最初に穴を堀ってから、その後約100年の間に血のつながりのある人物を何人も中に葬っています。

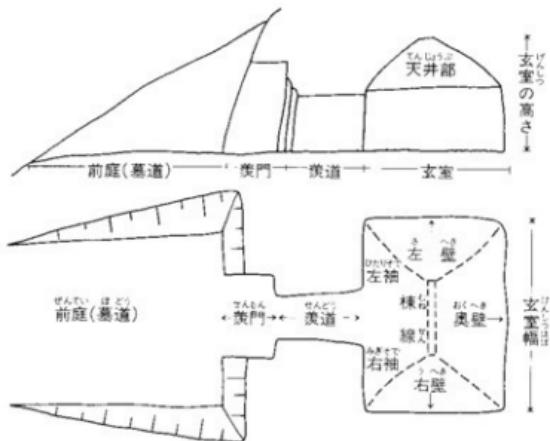
横穴はふつう一か所に数穴ないし数十穴もまとまって、群をなしたようなかっこうで堀られています。ですから「○○横穴群」という呼び方になります。ここ亀田の場合もそうですから、亀田横穴群です。『島根町誌』によれば、これまでに合計11穴が確認できています。まだ未確認の部分を含めると少くとも二十穴はあると思われます。横穴群が遠くからは、まるでハチの巣のように見えることでしょう。今まで言えども、共同墓地あるいは集団墓地です。今の墓地の多く



日本海が見晴らせる亀田横穴群

がそうであるように、集落や平野、海、川を見おろすながめのよい小高い場所に横穴群がつくられています。亀田の場合もその立地条件にかなっています。小波海水浴場の砂浜や日本海さらに小波の集落を一望できる標高10~20mの絶好の場所です。そして、山肌に直接穴を掘るのですから、その土質が適していることも条件です。掘りやすく、しかも、くずれにくい岩質、土質の所を選んでいます。ここ亀田の場合、風化した「火碎岩」という横穴群を掘るのに都合のよい、ほどほどに柔かくて加工しやすく、それでいてくずれにくいものです。古代人はこの点に日をつけて横穴群の場所を選んだのでしょうか。

次に横穴の構造についてふれます。まず、最も手前には、「前庭」という墓道があります。奥の墓に通じるテラスみたいなものです。ここでは「墓前祭」というような儀式をします。「玄門」は入口にあたります。ここに扉をします。閉塞用の石を積み上げたりします。「羨道」はその奥の「玄室」につながるトンネルです。「玄室」は遺体を横たえる部屋です。横穴の中心部になります。その天井は家形や九天井形あるいはテント形など様々です。玄室の床には遺体を納めた時にお供えした各種の遺物(副葬品)が並んでいます。ここ亀田の横穴からも、刀子(小刀)や土器などが見つかりました。



横穴模式図と各部位名称(『奥山遺跡発掘調査報告書』より)

横穴の時期

一 土器が物差し

横穴がいつごろ掘られて、使い始められ、そしていつごろまで、少くとも何回葬られてきたか(2回目以降を「追葬」と言う)——これを知る手がかりは、その横穴から出土した副葬品の土器です。特に有効なのは須恵器という土器の「蓋杯」という器種です。例えば女性のスカートが、時代の流れによってミニからロングへと変わっていくように、この蓋杯(蓋の付いた茶碗のような食器)は、次のように時期が下るごとに変化していきます。

時期	Ⅲ期	N期							
		B	A	B-1	B-2	C	D	E	
図									
世紀									
		7世紀前半			7世紀後半				
紀	六世紀後半	七世紀前半		七世紀半ば		七世紀後半		七世紀末	
年代(西暦)		600年						700年	
		約150年間							

1. Ⅲ期 山陰地方の蓋杯はⅠ期(5世紀末、今から約1500年前)からⅡ、Ⅲ、Ⅳ期(7世紀)というように大まかに4つの時期に分かれます。龜田横穴群の場合は、このうちⅠ期、Ⅱ期そしてⅣB-1型以降のものはありません。Ⅲ期のB型(6世紀後半、今から約1400年前)とⅣA型(7世紀前半、今から約1300年前)のものが見つかっています。Ⅲ期の特徴は、器面に「ヘラ削り」というていねいな仕上げの方法をしている点です。今回の発掘調査により龜田北第Ⅲ支群第1号穴から出土した蓋杯は、Ⅲ期B型に入りますが、その形は次のⅣA型に近い感じがします。Ⅲ期終末と

いう時期が適當かもしません。

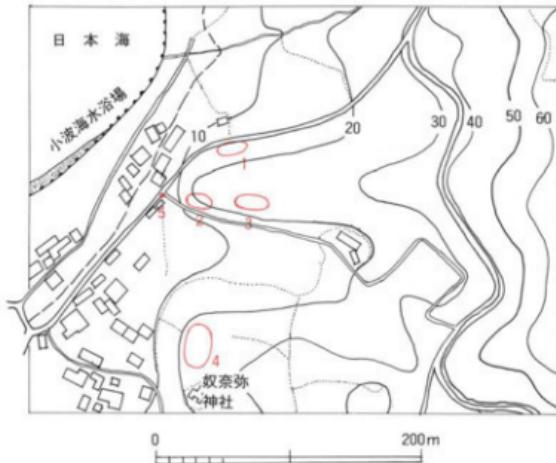
2. N A型 ここからⅣ期に入ります。杯部の受部（蓋を受ける部分）の立ち上がりがⅢ期に比べて低くなり、「ヘラ削り」の手法はなくなります。A型は次のB-1型に比べ人形です。B-1型と時間の隔りはないようです。A型とB-1型は7世紀前半と考えてよいでしょう。
3. N B-1型 A型に比べやや小形です。亀田横穴群からは今のところ、このN B-1型からN-F型までのタイプは発見されていません。（島根町大芦の宮尾横穴群からはⅢB型からN-F型まですべて見つかっています。）
4. N B-2型、B-1型に比べ一層小さくなります。次のC型と変わらぬほど小形化します。B-1型とは時間的に区分してもよいでしょう。C型とは分けないほうがいいでしょう。B-2型とC型は大まかに7世紀前半、そして細かくは7世紀半ばごろの時期とします。
5. N C型 B-2型とはほぼ同じ形ですが、蓋に乳頭状の小さな「つまみ」がつきます。
6. N D型 蓋に宝珠状の「つまみ」がつきます。このD型から7世紀後半にする分け方もありますが、B-2型、C型と合わせて7世紀半ばとする考えもあります。C型に比べやや大型化したように思われます。C型より少し新しいタイプと考えます。環はA～C型まで底には「高台」がなかったのに、このD型から高台付きとなります。
7. N E型 「輪状つまみ」がつくようになります。杯の「高台」もあります。7世紀後半のタイプです。
8. N F型 一見、E型と見分けがつきませんが、蓋の内側が異なります。E型には口縁内側に「かえり」が付きますが、このF型は、折れ曲がっただけで、「かえり」がありません。E型よりさらに新しく、7世紀もいよいよ終わりの時期です。

このように、土器の蓋杯を「時間の物差し」としてタイプ分けしました。これによって、横穴のつくられた時期や追跡について説明できます。

IV. 調査のあらまし

調査の方法

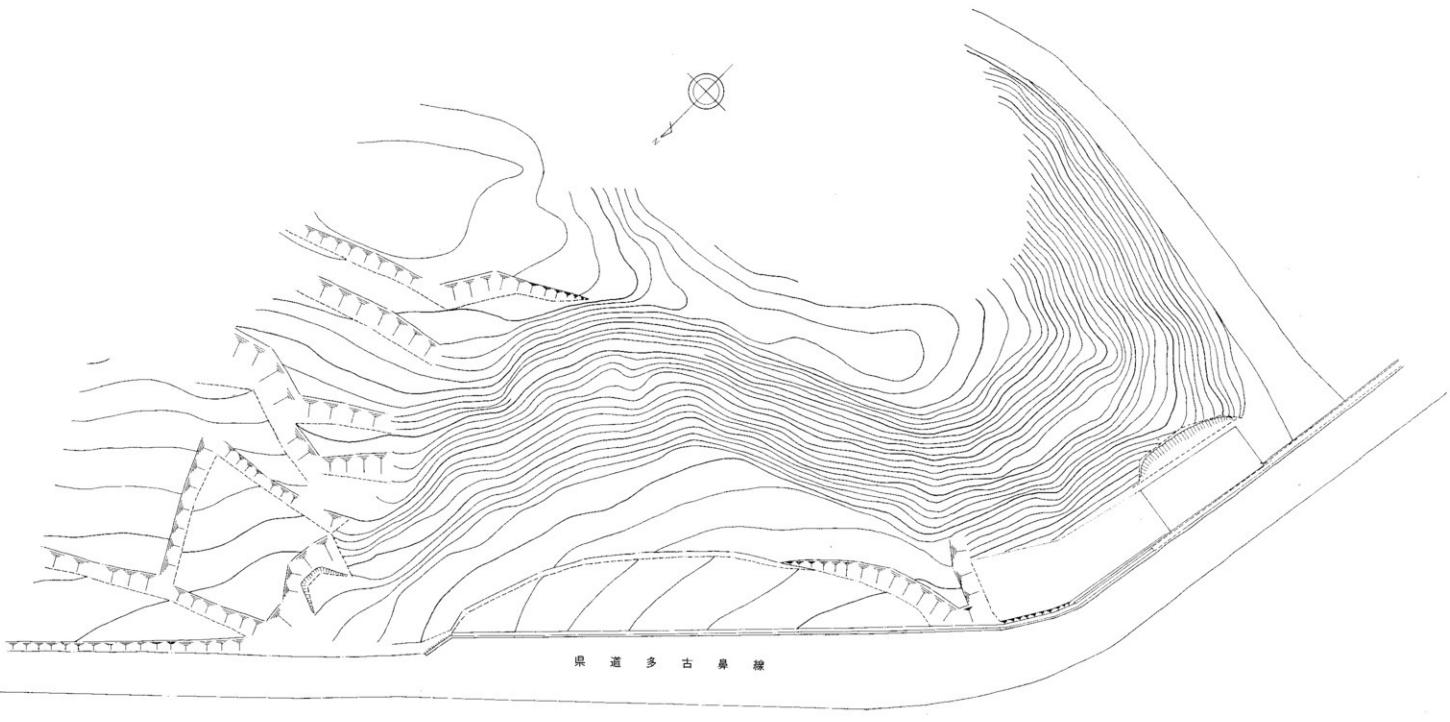
亀田横穴群は、島根町小波地内のかなみ集落の北端に位置します。夏は海水浴客でにぎわう小波海水浴場の東側100m位の所です。横穴群は約50m隔てて並んだ形の南北2つの低丘陵のすそ、標高約10~20mの斜面につくられています。横穴は今のところ合計11穴が知られています。(北側丘陵につくられているのを亀田北支群、南側のを亀田南支群と呼ぶことにします。) 北支群はさらに細かく見ると第Ⅰ支群、第Ⅱ支群、第Ⅲ支群に分かれます。南支群は奴奈弥神社の付近です。



亀田横穴群の位置図 (原図は『島根町誌』による)

1. 亀田横穴群北第Ⅲ支群
2. カ 北第Ⅰ支群
3. カ 北第Ⅱ支群
4. カ 南支群
5. 亀田・塚古墳

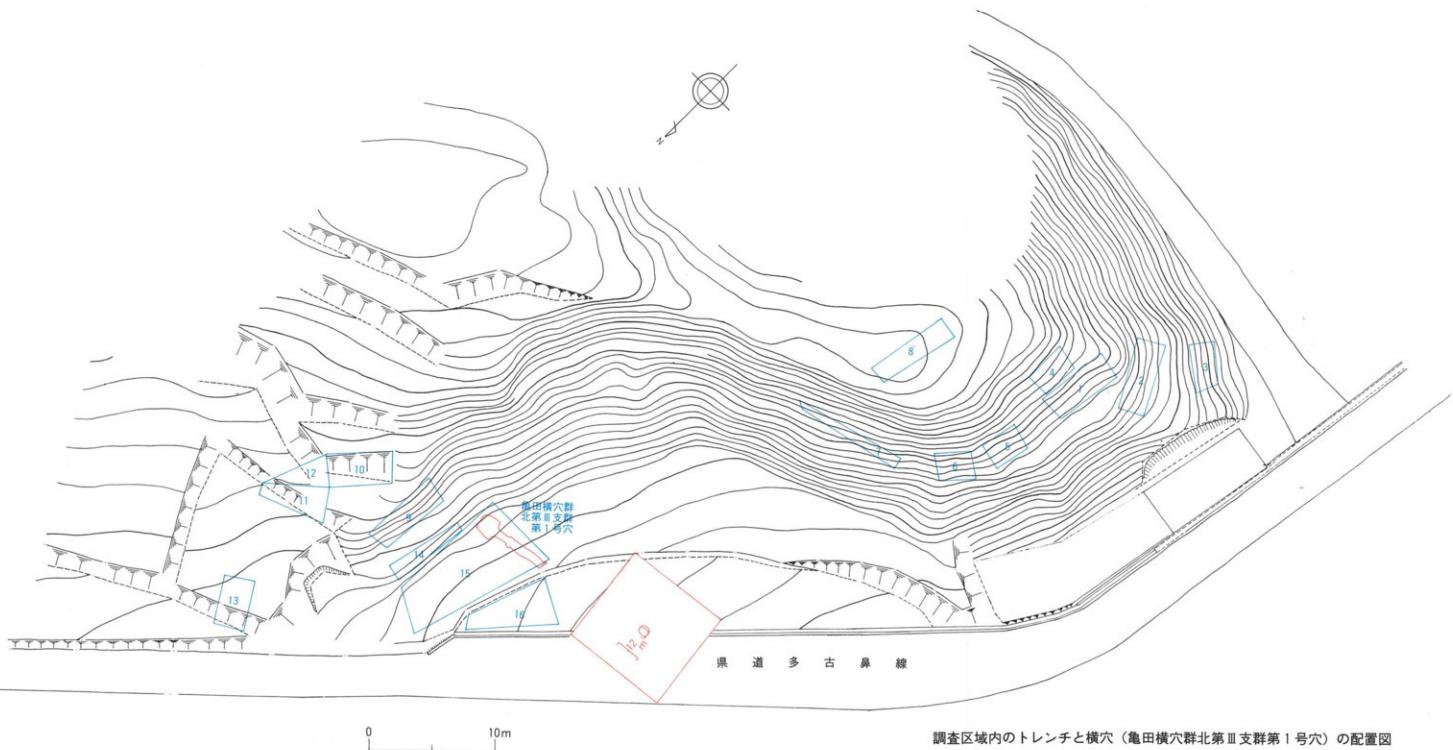
ここに横穴群があることは、すでに明治時代から知られていました。土砂採取中に開口した横穴と遺物が発見されていました。昭和62年発行の『島根町誌』によれば、北第Ⅰ支群は3穴(今も開口している)、北第Ⅱ支群は2穴、北第Ⅲ支群は3穴そして南



調査区域内の地形測量図

0 10m





調査区域内のトレーニチと横穴（龜田横穴群北第III支群第1号穴）の配置図



支群は3穴ということになっています。

今回の発掘調査は、県道多古鼻線拡幅工事区域が、北側丘陵の北第Ⅰ支群から北第Ⅲ支群にかけての部分と近接あるいは重なるために、実施されたものです。実は横穴群が掘られてから1400年も経つと、地表面の状態が非常に変化しております。斜面に掘られた横穴は、厚さ約20cm～200cmの土砂にすっかり埋もれてしまい、全くその姿が見えません。はたして工事区域内のどの辺りの表土の下に存在しているのか見当がつきにくい状況でした。ですから北第Ⅰ支群の從来から開口している3穴の北隣り、そして西隣りに続きの横穴が埋もれているのか、あるいは存在しないのか断言することができません。また同じように道路拡張区域内に入っている北第Ⅲ支群の場合は、鳥根町誌で紹介されている3穴がどこにあるのかも不明の状態でした。わずかに1か所、煙の端に凹んだ所があるので、あるいはこの下に横穴があるかもしれない可能性を考えた程度でした。ましてやその凹地の周辺一帯の工事区域内については確かなことが言えません。ただし、横穴群というのは斜面に沿って数珠つなぎのように続くのがふつうです。だから、存在のはっきりしている北第Ⅰ支群から第Ⅲ支群の埋もれているであろうと思われる範囲、つまり北側丘陵の西側一帯(約20m×90m)を調査区域とし、ここに探しのメスを入れることにしました。横穴探しが発掘調査の第一歩なのです。

まず今回の道路改良工事にかかる調査対象地の写真撮影や地形測量(縮尺1/100、50cmコンタ)を行い、全体の地形をつかみます。次に丘陵斜面や据の平地に大小様々な四角形のトレンチ(試掘溝)を全域に設定します。「調査区域内のトレンチと横穴配置図」にあるように全部で16本のトレンチ(①～⑯)を設けました。各トレンチ内を荒掘りし、表面の堆積土をとり除き、地山(元々の地肌)まで出せば、横穴が掘られて

いるかどうか肉眼で容易に判断ができます。道路改良工事区域内に一体いくつの横穴が埋まっているのかがわかります。

10月18日から始まったこの荒掘り作業はクワとスコップを使う重労働でした。ブルドーザなど機械力を使ったら便利なのですが、これだと横穴を見つけ



トレンチの荒掘り作業

るどころか逆にこわすことになりかねません。日本海からの冷たい北西風をまともに受けながら、雨天時には雨ガッパを着て、しかも雑木の根に邪魔されるつらい作業でした。実働12日かけ11月4日に終わりました。当初、亀田横穴群北第Ⅰ支群と接している第③レンチから横穴が発見されるのではないかと思っておりましたが、認められませんでした。北第Ⅰ支群がこの地点まで延びていないことははっきりしました。そのほか可能性の高いと思われる北第Ⅲ支群の西側、北第Ⅰ支群の尾根をこえた北側さらに丘陵の頂上付近など、どんどん掘ってみましたが、横穴は存在しませんでした。

結局、見つかったのは第⑨レンチから、北第Ⅲ支群第1号穴の1穴だけでした。すでにレンチ掘り前から、畑の一角に凹みが出来ており、ひょっとすると玄室かかく渢道の天井が落盤した横穴、つまり『島根町誌』で紹介されている北第Ⅲ支群の3つの横穴のうちの1穴ではないかと予想していたのですが、案の定その通りでした。他の2穴の場所は確定できませんでしたので、とりあえずこの横穴を「亀田横穴群北第Ⅲ支群第1号穴」と呼ことにしました。(『島根町誌』においても北第Ⅲ支群の3つの横穴の位置関係や号数については書いていないので。)なおこの北第Ⅲ支群第1号穴の右側(第⑨レンチから約2メートル離れた斜面)に並列する形で浅い凹みが認められます。3穴のうちの2つ目の横穴だと思います。残り1穴については全く見当がつきませんでした。

荒掘りの結果、横穴の存在箇所を見つけると、次は手掘りで精査します。横穴の中軸線と思われる部分に幅10cmのアゼを残し、土層を観察しながら進めます。クワとスコップが移植ゴテにかわり、竹ベラやハケで慎重に調べていく段階になります。ちょっと油断すると掘りすぎたり、遺物をこわしたりします。

横穴を元の状態にまで掘り上げると、きれいに遺構や遺物をそろじして出土状況を写真撮影し、さらに1/20の縮尺で図面(平面図、正面図、断面図)にとります。この作業にけっこう時間を要します。おまけに渢門に屏石などがありますと、約2倍の



移植ゴテや竹ベラを使って慎重に玄室の中を精査

努力と時間を要します。(扉石の状況を図面化しないと、石がとりはずせませんから。) 今回の龜田横穴群北第Ⅲ支群第1号穴も、そうした手間をとる閉塞施設がありました。調査期間が荒掘り作業終了の翌日11月5日から11月30日まで実働20日もかかりました。予定より大幅に延びたのは、この横穴に扉石と玄室内の石床が設けられていたことに原因します。

実測作業は風雨の日でもやりました。真冬並みの寒さを感じ、つらい仕事でした。その上、また暗なしかも身動きしにくい狭い玄室の中で、背を丸めながら、かい中電灯のあかりだけを頼りに方眼紙に向かう日が続きましたので、ずいぶん骨が折れました。なお実測の基準とした標高は工事用のものを使用しました。

では、北第Ⅲ支群第1号穴の様子を述べていきます。

龜田横穴群北第Ⅲ支群第1号穴

玄室(遺体を納める部屋のほぼ全体と羨道(玄室に通じるトンネル)の一部の大井戸は落盤していました。(発掘前に認められていた凹みは、この大井落盤部分でした。) 落盤のお蔭で、盗掘を受けていなかったのは幸でした。玄室はおよそ1畳半の広さです。ふつうの横穴に比べやや狭い感じです。天井がなくなっているのではっきり言えませんが、玄室の床面から大井までの高さは、せいぜい1m前後で、これまた一般的な横穴に比べ低いです。ですからよけい狭く感じるかもしれません。要するにこの横穴は小形の部類に入ります。玄室の平面形は適確に表現しにくい不整形な正方形です。左側だけ見ると台形とも言えます。残っている天井部から丸天井形が考えられます。左壁と右壁から天井につながるカーブがアンバランスです。床面の中央に排水用の溝が掘ってあります。しかし、この溝は、羨門から羨道にかけての中央にある溝とつながらないで、途中でとぎれています。玄室から羨道とまでの床面がゆるやかに傾斜しているから溝を掘る必要がなかったのかもしれません。羨道と前庭(墓道)はこの玄室の大きさにしては、けっこう長いと言えましょう。

玄室、床面の右側には、遺体を横たえる「石床」が特別に設けられていました。厚さ4cm前後の板状石(玄武岩)8枚をつなぎ合わせて積きつめたものです。最も奥壁に近い所には枕石(遺体の頭を置く)と考えられる同様の板石を乗せています。人骨は残っていませんでした。くさってなくなってしまったでしょう。

石床の上やその付近には蓋杯や高杯など須恵器の食器類が供えてありました。蓋杯のタイプはⅢBとⅣAの2種類あります。ⅢBの時期(6世紀後半)にこの横穴は掘られ、その後、追葬(入口の扉を取り除いて新しく遺体を入れる)をⅣAの時期(7世紀後半)に行った、と言えます。ⅢBの土器(2)やⅣAの土器(4・5・9)が完形で

はへん じょうたい
なく破片の状態になっていたのも、この追葬の時にこわれたか、あるいはこわしたかもしません。少なくとも2回は追葬があったことを示しているようです。

ひだりはし てつせいとうす こがなな
石床の左端に鉄製刀子（小刀）が1本供えられていました。刀子には「魔よけ」の
いえき 意味があるという説もあり、大いに興味が持てます。

注目すべきは、この横穴の閉塞状況です。渓門（渓門の入口）には、玄室の石床と全く同じ玄武岩質の板状斜行を3枚を重ね合わせて立てかけていました。板石の下部には数個の礫（通称「海石」。海水のため表面がなめらかになった石）を置きさらに板石が倒れないように、根元の前後に黄褐色の粘土をつきかためてありました。その粘土層の上部から須恵器が3個（3・6・7）出土しましたが、これは扉石で閉じる際意図的に粘土の上に置いたのではないでしょうか。一種の送葬儀礼（葬式のやり方）として。

うみいし
なお、「海石」は近くの小波の海岸から運んだものでしょうが、玄室の石床と扉石に用いた石材は、ここから1キロメートル以上離れた沖泊から、はるばる運搬されたようです。（島根町近辺では、沖泊の海岸だけに、この種の玄武岩があるそうです。）打撃を加えると薄く板状に割れる性質があります。当時の人々は、この点に着目して用いたのでしょうか。

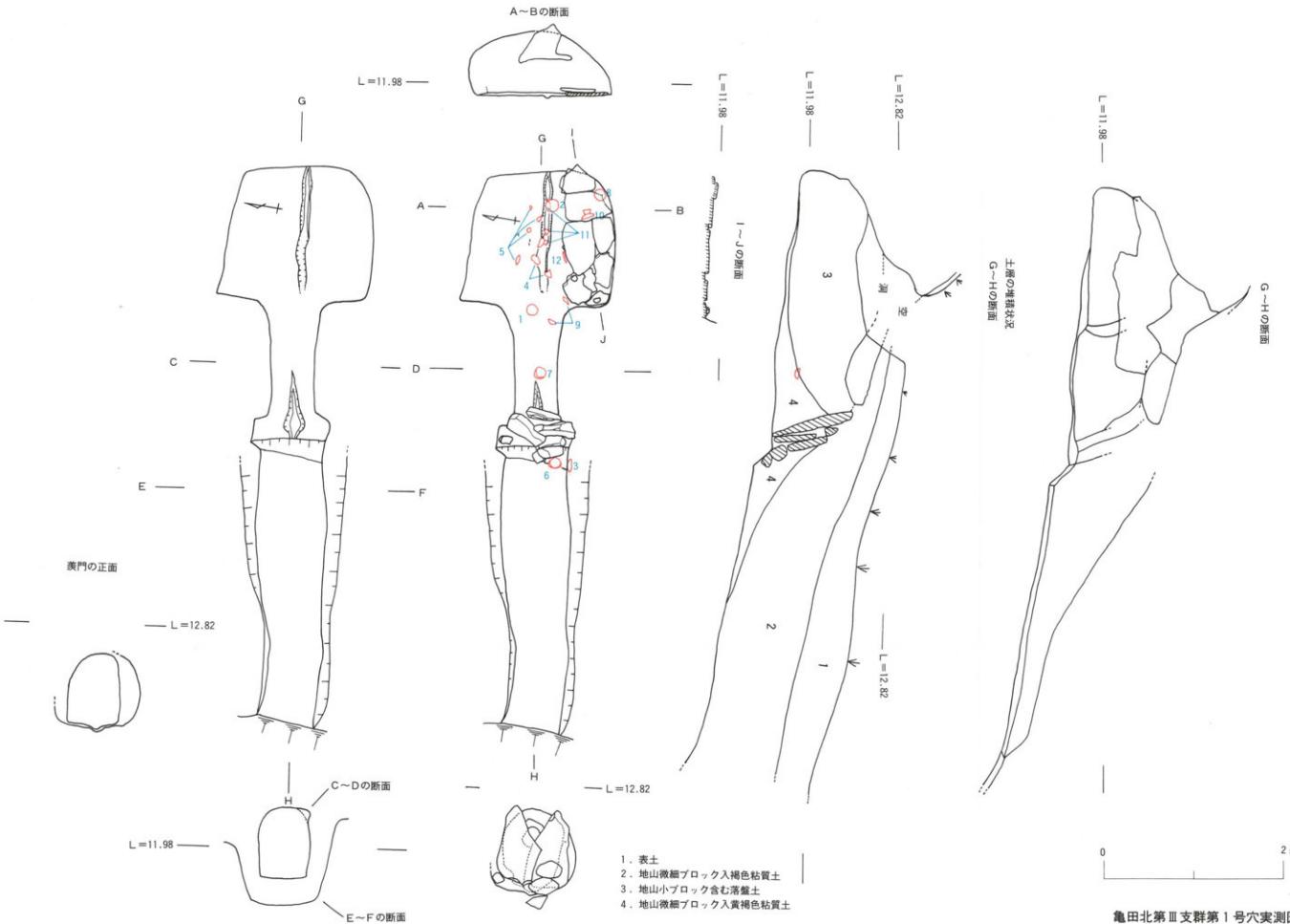
このように、この横穴は大きさや形、出土品び種類と量ではやや物足りなさを感じますが、玄室の石床とか丹念な閉塞方法を採用している点など注目すべき点が多いです。

ないせん
※なお前庭の大半は工事のためなくなりますが、渓門～玄室は調査後埋め戻し作業
をせずして、保存されています。

横穴観察表

（単位：m）

玄室	標高 (床面)	平均	奥行	1.48	奥幅	1.24	前幅	1.60	最大幅	1.60	高さ	不明
	平面形	不整形な正方形			天井 の形態	丸天井			型式			
	埋葬施設	左側	なし		右側	石床、枕石		奥	なし			
通道	長さ	1.25	奥幅	0.70	前幅	0.52	高さ	0.84	横断面の形	隅丸の長方形		
閉塞施設	石材	3枚の板状石（玄武岩）	と数個の礫で閉塞している。						縫合有無	有		
前庭部	長さ	3.10			幅	0.74						
排水溝	玄室の中央と渓門～通道の一部。											
その他	渓門に設置がついている。											



龜田北第Ⅲ支群第1号穴実測図



遺物出土位置

玄室	杯蓋 2 個 (いずれも破片の状態で出土)、杯身 2 個、高环 2 個、鉄製刀子 1 本
義道	杯蓋 2 個 (このうち 1 個は個体の破片が玄室にも遺存)、杯身 1 個
前庭	杯蓋 1 個、杯身 1 個

築造時期および追葬

築造年代	古墳時代後期 (6世紀末)	須恵器型式	日期 (B) N 期 (A)	追葬有無	右	人骨有無	無
備考	玄室と義道 (一部分) の天井が落塗。追葬の最終回には、閉塞石の前後 (石材が倒れないように前後に盛り上げた粘土層) に土器を供獻している。						

北第Ⅲ支群第 1 号穴出土遺物観察表

番号	取り上げ番号	器種	寸法 (cm)	底	胎土	焼成	色調	備考	タイプ
1	No. 7	杯蓋	12.2	3.9 ~ 4.1	密 細砂をやや 多く含む	良好	灰 色	外皮一天井部へラ切り後回転へラ削り、その後回転ナゲ	Ⅲ 月
2	No. 19	杯蓋	12.0	4.3	1mm 大の砂 粒を含む	良好	青 灰 色	内底一回転ナゲ天井部静止ナゲ 外皮へラ切り後、人井部は回転へラ削り、圓窓はナゲ調整、下部は回転ナゲ。口縁部に「矣」の沈線らしきものがあるが、沈線としてはかなり浅く、不明瞭。	Ⅲ B
	No. 20	杯蓋	12.0					内面一回転ナゲ、人井部静止ナゲ 焼け歪みがある。	
3	No. 1	杯蓋	11.6	4.5	3mm 大の砂 粒を含む	不良	黄 白 色	外皮一大井部焼成底く難煮できない。体部回転ナゲ。	Ⅳ A
4	No. 17	杯蓋	12.9	5.0	密 2mm 大の砂 粒を少量含む	良好	淡 灰 色	内面一回転ナゲ	Ⅳ A
	No. 18	杯蓋	12.9					外皮へラ切り後回転ナゲ。人井部に当て具の痕跡 (?)	
5	No. 13	杯蓋	11.9	4.6	1mm 大の砂 粒を含む	良好	青 灰 色	内面一回転ナゲ、天井部静止ナゲ 外皮の半分程度に自然焼	Ⅴ A
	No. 14	杯蓋	11.9					外皮一天井部へラ切り後ナゲ調整、休部以下回転ナゲ	
	No. 15	杯蓋	11.9					内面一回転ナゲ、天井部静止ナゲ	
	No. 16	杯蓋	11.9					外皮一天井部へラ切り後回転へラ削り、工部回転ナゲ	
6	No. 2	杯身	14.0 (受部) 11.6	3.4 ~ 3.8	密 1mm 大の砂 粒を含む	不良	灰 白 色	内面一回転ナゲ天井部上部回転ナゲ 焼成が悪いため、上縁周辺の密着が美しい。	Ⅲ B
7	No. 3	杯身	14.3 (受部) 12.0	4.1 ~ 4.8	粗砂と 4mm 大の砂粒を 含む	良好	淡 灰 色	外皮へラ切り後回転ナゲ、底部は推ナゲか (?) 内底一回転ナゲ、上部回転ナゲ	Ⅴ A
8	No. 5	杯身	13.5 (受部) 10.8	3.5 ~ 3.8	密 粗砂を少量 含む	良好	淡 灰 色	外皮へラ切り後、若干のナゲ調整 内底一回転ナゲ、上部回転ナゲ	Ⅴ A
9	No. 6	杯身	13.6 (受部) 11.1	4.6	1mm 大の砂 粒を含む	良好	灰 色	外皮一回転ナゲ回転へラ削り、上部回転ナゲ 内底一回転ナゲ、底部静止ナゲ、脚部回転ナゲ 外皮底から口縁部にかけて一部暗青灰色の自然釉かある。やや焼け歪んだ部分がある。	Ⅴ A
10	No. 4	高环	15.8	9.5 ~ 10.0	密 1mm 大の砂 粒を含む	良好	青 灰 色	外皮一回転ナゲ、底部静止ナゲ、脚部回転ナゲ 内底一回転ナゲ、底部静止ナゲ、脚部回転ナゲ 脚部に三角形すかしが 2 つある。焼け歪みが著しい。	Ⅴ A
11	No. 11	高环	13.5	8.0 ~ 8.3	密 4mm 程度の 砂粒をやや 多く含む	良好	青 灰 色	外皮一回転ナゲ底部へラ削りの痕跡、脚部 もやめ柱は回転ナゲ	
	No. 12	高环	13.5					内底一回転ナゲ、底部静止ナゲ、脚部回転ナゲ	
	No. 21	高环	13.5					外皮一面に自然釉がかかり青灰色の光沢がある。 脚部にすかしの切り込みが 2 つあるが貫通していない。 脚部内面には脚外側の切り込みと同様に斜 に切り込みが 2 つ見られる。焼け歪みが著しい。	
	No. 22	高环	13.5						
12	鉄製刀子	全長	11.2					基部には若干の木質が残っている。	

北第Ⅲ支群第1号穴



1. 発掘をする前の状況



2. 羣門（玄室の入口）を
扉石で閉じている状況
(右下に須恵器が出土し
ている)



3. 扉石をはずしたところ

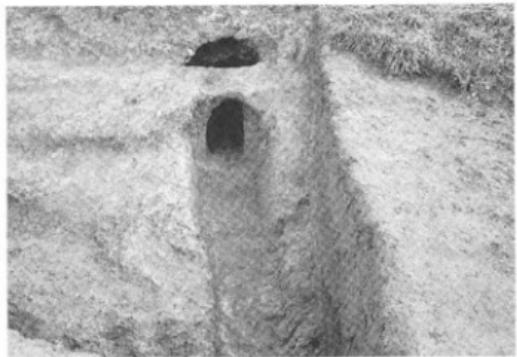
4. 玄室内の状況
(右側は石床)

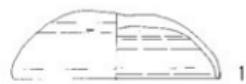


5. 遺物出土状況

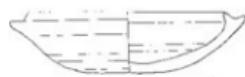


6. 前庭から見たところ
(発掘調査終了直後)





1



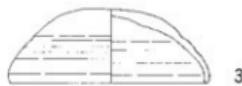
6



2



7



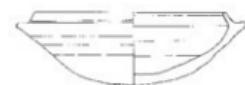
3



8



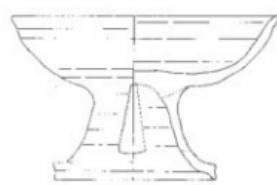
4



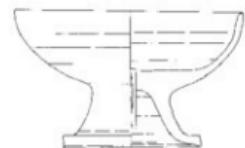
9



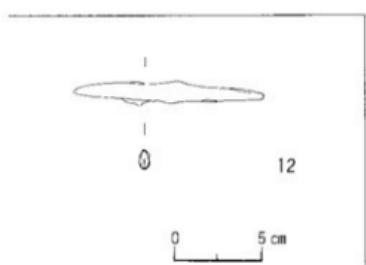
5



10



11

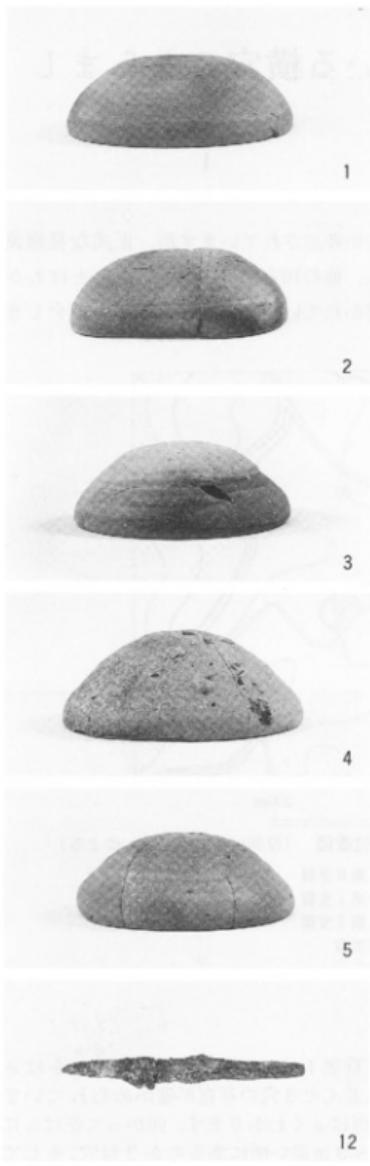


12

0 5 cm

0 10cm

龜田横穴群北第Ⅱ支群第1号穴出土遺物実測図



V. 今までに知られている横穴のあらまし

はじめに

亀田横穴群は今までに合計11穴の横穴の存在が確認されていますが、正式な発掘調査は今回の北第Ⅲ支群第1号穴が初めてでした。他の10穴について詳しいことはわかりませんが、昭和62年発行の『島根町誌』に書かれていることを中心にして紹介します。

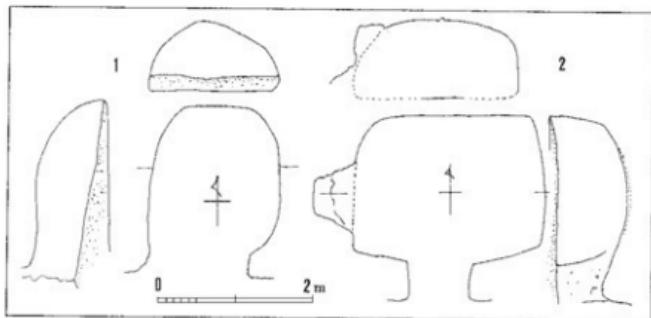


亀田横穴群の位置図 (原図は『島根町誌』による)

- 1. 亀田横穴群北第Ⅲ支群
- 2. " 北第Ⅰ支群
- 3. " 北第Ⅱ支群
- 4. " 南支群
- 5. 亀田・塚古墳

1. 北第Ⅰ支群

今回の発掘調査によって見つかった北第Ⅲ支群第1号穴の南側、つまり尾根をはさんだ反対側にあります。(2)今までに道ばたに並んだ3穴の存在が確かめられています。現在、入口が土砂に埋もれていますが、場所はよくわかります。向かって左はしにあるのが1号穴、その右約3.5m、道路から2~3m高い所にあるのが2号穴。そして



亀田横穴群北第1支群 1号横穴と2号横穴

1. 1号横穴 2. 2号横穴

(『島根町誌』より転載)

2号穴から約3.5m右にあるのが3号穴です。3穴とも北第Ⅲ支群第1号穴と同じように玄室の天井は丸天井形ですが、玄室そのものは、かなり大きいようです。中でも2号穴は最も大きく、天井の中央に凹線で棟の線が表されています。

昭和18年山本清氏（現在島根大学名誉教授）が現地踏査された際、地元の川岡正雄氏から次のような情報を得ておられます。

- 1号穴はずっと前から開いていた。出土品は不明。
- 2号穴は40年前、採石工事の際に開いた。穴の後ろの方に人骨があり、近くに7～8個の玉（勾玉など玉類）もあった。また鏡（金属製の輪）とたくさんの土器も出土した。
- 3号穴はいつごろ開いたか、そして出土品についても不明。

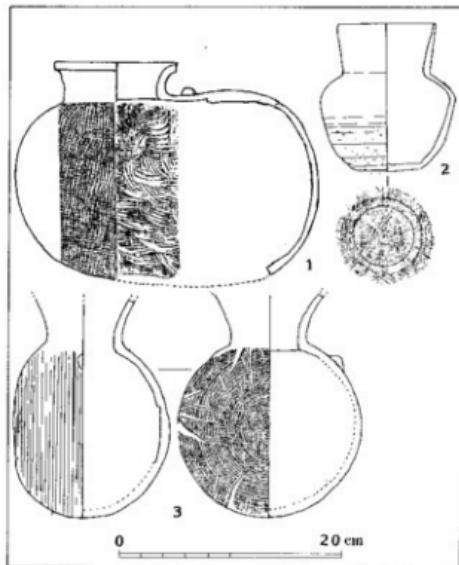
川岡氏談を要付けるように東京国立博物館の木村豪章氏「古墳時代の基礎研究稿一資料編(1)」（東京国立博物館紀要第16号、昭和56年3月）には次のような記載があります。

⑨	八束郡島根町人字野波 (元、野波村大字野波字角田)	横穴	横穴
環壙勾玉2、瑪瑙勾玉片1、水晶勾玉1、平瓶1、壇1、提瓶1 环3、壺8、高杯2、提瓶1、壇1、人骨	1909年1月11日	東洋 土砂採掘、中村佐太郎	地元

出土品目の上の段は東京国立博物館にしまってあるもの、下の段の品目は、地元に下がわたされたものようです。地元保管の品物については不明ですが、上段の遺物は今も東京国立博物館にあり、松本岩雄氏（島根県教育委員会勤務）が実際に図面を作られました。それによれば、須恵器はⅣ期（7世紀）のものです。

さらに松木氏からのご教示により、次の資料も入手できました。これは『考古界』第8編第4号（考古学会1909年、明治42年7月20日発行）の201ページにある部分です。
これでもう疑う余地はありません。

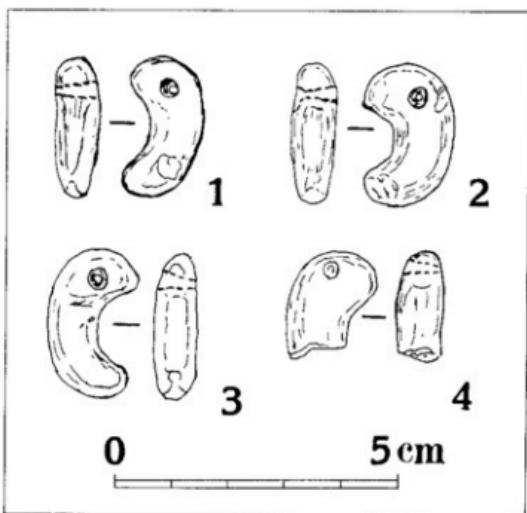
◎出雲國野波の古墳發掘 島根縣八束郡野波村大字野波字龜田なる同村中村佐太郎所行の畠地にて於て同人が溜池修繕の爲土砂掘取に際し四月十一、十二の兩日に口徑約一尺五寸深一間半幅約一間の洞穴あるを發見し内部に瑪瑙曲玉三個、水晶曲玉一個、齋瓶平瓶一個、捉瓶二個、壺二個、高杯二個、杯身三個、杯蓋八個と人骨の存在せるを發見せしにより届出の上宮内省の命令により東京帝室博物館へ差出たりと云ふ平瓶は徑一尺高七寸にして形状珍しきものなり（和田）



龜田横穴群北第1支群第2号穴出土須恵器

（東京国立博物館蔵・松本岩雄氏原図による）

（『島根町誌』より転載）



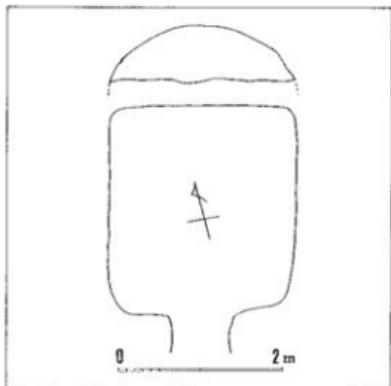
亀田横穴群北第Ⅰ支群第2号穴出土

(東京国立博物館蔵、松本岩雄氏原図による)

1、3、4は瑪瑙(めのう)、2は水晶(すいしょう)

(『鳥根町誌』より転載)

2. 北第Ⅱ支群



亀田横穴群北第Ⅱ支群 1号横穴

(『鳥根町誌』より転載)

北第Ⅰ支群の東北約30~40mの丘陵南斜面に2穴あります。昭和12年~13年ごろ畑が落ちこんで開いたのが第1号穴です。今回発掘調査した北第Ⅱ支群第1号穴と同じように玄室の天井は丸天井形ですが、広さは1.5倍以上もあります。また人骨も出土しました。

第1号穴の約6m西に第2号穴があります。かへこう大正2年ごろ開口したそうです。やはり玄室の天井は丸天井形でした。

3. 北第Ⅲ支群

今回発掘調査した横穴のグループです。元は3つ開口していたそうです。昭和51年4月山本清氏の2回目の踏査の際には2穴認められたようです。このうちの1つは全容が明らかになった第1号穴で、他の1つはそのつい右隣りに認められる凹地の所でしょう。

4. 南支群

北支群のある小丘陵から約100mほど南の丘陵の西のはしにあります。元は3穴開いていたそうですが、昭和61年の時点では1穴だけ確認されました。北支群の横穴と同じように丸天井形の南向きの横穴でした。南支群の遺物については不明です。

こうごくすみじき 考古学豆知識

N.3

古代の食器



亀印横穴群からも当時の人々が日常生活で使っていた食器がたくさん出土しました。
蓋杯は今の茶碗でしょうか。高杯は食物を盛るもの。変わったのが壺です。
胴体のまん中に穴が1つあいています。ここに竹筒のようなものを差しこんで、ちょうど今の「きゅうす」のように水や酒などの液体を注いだのでしょうか。

V. まとめ

今回の調査には次のような意義があり、成果がありました。

亀田横穴群一覧 いちらん

支群	番号	横穴の形態	おもな出土遺物	時期	備考
北第Ⅰ支群	第1号穴	梢円形気味の長方形 プラン 丸天井形	不明	不明	
	第2号穴	長方形プラン 丸天井形 天井の中央に凹線で 模の縁を表現	メノウ勾玉1、メノウ勾玉片1、 水晶勾玉1、平鏡1、提携2、 縊2、高环2、杯身3、 杯蓋8、人骨	N期 (7世紀)	
北第Ⅱ支群	第3号穴	丸天井形	不明	不明	
	第1号穴	丸天井形	人骨	不明	
北第Ⅲ支群	第2号穴	丸天井形	不明	不明	
	第1号穴	不整形な正方形プラン 丸天井形	鉄製刀子1、交杯2、 杯身4、杯蓋5	Ⅲ期(B) (6世紀末) Ⅳ期(A) (7世紀前半)	玄室内に板状石の石床 玄門に閉塞用の石積み
南支群	第2号穴	不 明	不明	不明	
	第3号穴	不 明	不明	不明	
支群	第1号穴	丸天井形	不明	不明	
	第2号穴	不 明	不明	不明	
	第3号穴	不 明	不明	不明	

1. 今回の発掘調査により本横穴群には合計11穴の横穴があること確認しました。
 未調査の範囲（特に南支群の周辺）を含めると、総数は少なくとも20穴近くになるでしょう。今のところ島根半島で第一級の横穴群です。

2. 龜田横穴群のおよその分布範囲がつきとめられました。本横穴群は島根町大芦の宮尾横穴群のようにハチの巣状に丘陵斜面に沿って連続的に数珠つなぎに掘られていません。2~3穴ずつの小グループ、つまり支群ごとに（それもある程度の間隔をおいて）点在する形をとっていることがわかりました。同じ町内にある横穴群でも、横穴群の構成の仕方に大きなちがいがあります。
3. 大小16箇所トレンチ掘りをした結果(1)北第Ⅲ支群が本横穴群の北限になるようです。(2)北側丘陵の横穴群の範囲と分布状況が限定できました。(3)北第Ⅰ支群と北第Ⅲ支群は50m以上の隔りがありました。(中間に横穴は存在しないようです。)(4)北第Ⅱ支群の場所が確定できました。
4. 今回の発掘調査は島根町で3回目でした。(平成元年度大芦の宮尾横穴群第1次調査、2年度第2次調査。)野波地区(旧野波村)では初めてでした。
5. 第16トレンチ内で検出された北第Ⅲ支群第1号を精密に発掘調査することにより次のことがわかりました。
- (1) 龜田横穴群の築造開始が6世紀後半ないし6世紀末にまで、さか上ることが、山上した須恵器から言えます(蓋坏の蓋がⅢ期Bの形式だから。従来、東京国立博物館に所蔵されている北第Ⅰ支群出土須恵器から、およそ7世紀としか言えませんでした。)横穴は6世紀の半ばごろに(Ⅲ期Aの時期)出雲地方の平野部に登場しますが、龜田の場合、少し遅れて6世紀後半ないし6世紀末にスタートするようです。つまり出雲地方で最も横穴が盛んにつくられるようになってから開始しています。一方、終わりの時期は今のところ断言できませんが、平野部と同時の7世紀後半が考えられます。少なくとも約100年間本横穴群が使用されていたことはまちがいありません。
- (2) 玄室の天井形式を丸天井にした横穴が、これで7穴となりました。11穴のうち7穴です。(他の4穴は不明)どうやら本横穴群は丸天井が主流のようです。大芦の宮尾横穴群の場合、23穴のうち丸天井は1穴のみで、テント形あるいは家形が17穴と圧倒的でした。この点でも本横穴群とのちがいが明らかに浮かび上がってきました。
- (3) 横穴の玄室の大小や中に納められている副葬品の優劣は、被葬者間の身分や地位の上下を示します。ふつう横穴の被葬者は中流ないしそれ以上の有力者層と言われていますが、その中でも上下関係がありました。今回精査された北第Ⅲ支群第1号穴は、小形の部類に入ります。形状や大きさそして出土品の種類と量という点から、横穴群全体の中では、低いランクになります。しかし、玄室の床面に石床を設けたり、魔よけの意味をもつ刀子を副葬したり、あるいは丹念な閉塞方

法（入口の扉石）をとるなど、注目すべき点も多いです。将来、横穴群の全容が明らかにされ、横穴群全体の被葬者の組織や構造そして相互関係が論じられる時、本横穴の調査結果が生かされ、その価値が改めて高く評価されるでしょう。

- (4) 玄室の石床と済門の扉石に使った石材は、打撃を加えると薄く剥離しやすい玄武岩の板状のものでした。これは横穴の近辺（例えば小波地区や野波地区）にはなく、約1.5km離れた沖泊地区の海岸に露呈しています。そこからわざわざ運んできたのでしょう。
- (5) 渔業に関係した副葬品はありませんでした。済門の扉石の根元に使った数個の「海石」は近くの海岸から運んだものでしょう。
- (6) 出土した須恵器の蓋杯と高杯は一体どこで作られたのでしょうか。今のところ、松江市朝馳、大井、大海崎のあたりの窯で生産されたのが移入されたものだ、と考えます。
6. なぜ横穴群を亀田の丘陵につくったのでしょうか。それは火碎岩という適度にやわらかくてそしてくずれにくい性質の地山に着目したからでしょう。また、日本海がよく見えるし、今的小波地区的集落も見渡せる一等地であることも関係しているでしょう。
7. 横穴群があるということは、近くに集落があったことを示しています。すでに今からおよそ1400年前（6世紀末）比較的まとまった水田と天然の良港から得られる経済力を基盤とした相当規模の「むら」が栄えていたことが想像できます。亀田の横穴は村内の中流ないしそれ以上の有力者およびその家族の墓だったと考えられます。



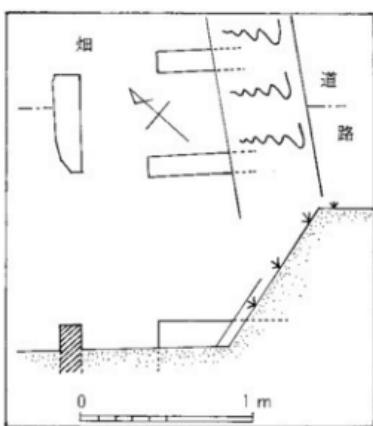
現地説明会（平成3年12月1日、町民約80名参加）

8. では、亀田横穴群の被葬者の「むら」は、目の前にある今の野波の小波地区的範囲でしたでしょうか。さらに南隣りの野波の野波地区まで拡げて考えた方がいいのか、あるいは東隣りの瀬崎地区、野井地区とか北隣りの多古・沖泊地区まで含めるべきか、今の時点では判断できません。⑩ 野波村内であることは確かでしょう。

9. 占墳時代後期（6～7世紀）の古墳には、①まんじゅう形の墳丘を築き、その内部に遺体を納める石棺や石室を設けるものと②横穴の2種類があり、ふつう前者の方が後者より上位の被葬者と言われています。尖は亀田横穴群のごく近くに「亀田・塚古墳」（石棺がある）があり、また500mほどなれた所には①の占墳の可能性もある明ヶ谷遺跡、さらに約1km南方には同じく①の占墳と思われる権現山遺跡もあります。これら墳丘をもつ占墳と亀田横穴群とは、はたしてどのような関係になるでしょうか。今後の検討を必要とします。

10. いずれにしても、亀田横穴群の調査結果が、島根町はもとより島根半島全域の古代史解明に大きな一石を投じたことは否定できません。（例えば同じ島根町内でも約6.5km離れた大芦の宮尾横穴群とは、各横穴の分布状態や玄室の大井形態など、大きな違いがあきらかになりました。宮尾は支群分けができるほど密集して掘られているのに対して、亀田は2～3穴ごとに支群を構成しています。また宮尾は玄室天井がテント形ないし家形がほとんどで丸天井はわずか1穴なのに、亀田は丸天井が主流のようです。）そればかりか、当時の日本の一般的な村落社会の構造（仕組み）を考えていく上で貴重な基礎的資料になりました。今後、この方面の研究上重要な資料となります。

11. 今回の発掘調査中、地元の野波小学校5～6年生全員、野波中学校1～3年生全員、島根町教育研究会高学年部会教職員全員そして延べ200名におよぶ町民の皆様が直接現地へ足を運んで下さいました。今後、この調査報告書が社会科学習の教材として、郷土学習の資料として、学校教育と社会教育の両方で有効活用されることを期待しております。私達のほんの身近な所に、これだけ価値のある遺跡が眠っていたのです。



亀田・塚古墳見取図
(『島根町誌』より転載)

参考文献

- 山本 清「出雲と島根町の古墳のあらまし」(『島根町誌』1987年)
門脇俊彦「山陰地方横穴墓序説」(『古文化談叢』1980年)
山本 清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』1951年)
山本 清「横穴の型式と時期について」(『山陰古墳文化の研究』1951年)
山本 清「横穴被葬者の地位をめぐって」(『島根考古学会誌第1集』1984年)
松本岩雄「原始・古代の美保関」(『美保関町誌』1986年)
山本 清「山陰の古代文化」(六興出版1989年)
島根町教育委員会『宮尾横穴群』1990年
島根町教育委員会『宮尾横穴群第2集』1992年

なお、本報告書作成にあたって松本岩雄氏、西尾克己氏および広江耕史氏のご教示を得ました。また、「考古学豆知識」の中のさし絵には、高橋秀子氏の作品と県教育委員会文化課発行資料の中から転用したものがあります。

こうこがくきめちしき

考古学豆知識 N.4 —古代の玉作りの方法—



勾 なま 十



〈玉作りの方法〉

今回の発掘調査では見つかりませんでしたが、明治42年龜田横穴群北第Ⅱ支群第2号穴から勾玉などの玉類が出土しています。大ざっぱにその作り方は次のようです。

- ① 玉の原石を掘り出す。
- ② 原石をタガネのような道具で適当な大きさに割る (形割)
- ③ 砥石で磨き上げる。
- ④ キリのようなもので、ヒモ通し用の穴をあける。ただし、キリの先はとがっていないので、細かい砂の回転の助けを借りる。
- ⑤ 仕上げ。丸味と光沢を出す。
- 木製の砥石を使うとツヤが出る。

龜田横穴群

平成5年3月

発行 島根町教育委員会
〒690-04
島根県八束郡島根町大字加賀1455
TEL.(0852)85-3252

印刷 (有)高浜印刷所
〒690 島根県松江市北堀町8
